

「エン・クリスト」49 号 わが福音

1992 年 1 月発行

最近ルカ伝福音書を読んでいて強く感じたことを書き記そう。

洗礼者ヨハネが獄中から弟子をイエスのもとへ遣わし、

「来たるべき方は貴方ですか、それとも他にどなたか別の方を待つべきでしょうか」

と尋ねさせた。イエスは答えられた。

「貴方がたの見聞きしたところをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足のなえた人は歩み、癩病人は潔められ、耳の聞こえぬ人は聞こえ、死人は甦えらせられ、貧しい人たちに福音が語られている。私に躓かぬ人はさいわ

いだよ」(ルカ 7・18～23)

ヨハネは、主イエスこそは

「火と聖霊とをもつてバプテスマ(洗礼)を施す方」

だと証ししていた。この「火と聖霊」は「焼き尽くす火」「審判の火」を意味していた。だから審判を免れるために「悔改めをなせ」と激しく人々を叱責した。ところが、イエスの御業は、審判ではなくて、罪人をゆるし、病者をいやし、死人をも甦えらせ、貧しい人々に神の国の福音を語って勇気づける、といったことであつた。ヨハネは躓いた。

主イエスがこの罪の世に来て下さっていること、そのことが既に福音なのだ。主イエスの御言、御業は、ことごとく終末の神の国の迫りの中から語り出され、なされている。終末に訪れるのは審判とその後に成就する天国(イザヤ書 35 章の事態)である。主イエスはこの両者を体現なさっている。天国の実証が癒しの御業の中に現われていた。単なる奇蹟ではなく、来たるべき天国の徴であつた。他方、審判の方は、御自身が全部引き受けてしまわれた。だから、人に対しては審きではなく、ゆるしを与えていかれた。神の烈しき審きを十字架という「血のバプテスマ」をもつて引き受け給うた。これに裏打ちされたゆるしであつた。

主イエスはこの世をも、世の人をも、終末の光の中で、愛の光の中で見ておられる。その光の中でイエスの御業、御言にふれるとき、何と暖かく、全身に主の愛が流れ込むことか！私は主キリストを恋慕^{みたま}う。十字架の主は同時に光輝く復活体の主であり、愛の光で包み、わがうちに宿り給う聖霊^{みたま}の主である。この一如なる主の中に祈り入り、主と一如なる相に化していただく。これだけである。



「エン・クリスト」50 号（記念号）

エン・クリスト第 50 号に寄す

1992 年 4 月発行

今春で小池辰雄先生はめでたく米壽（八十八歳）を迎えられた。まことに喜ばしく嬉しい。併せて先生が心血を注いで主筆として健筆をふるってこられたエン・クリスト誌が 50 号という一つの記念すべき号数に到達したことに心からの祝意を表したい。50 号という数字自体は大したことではないかも知れない。しかし、その内容をひもとくとき感慨ひとしおである。そこには日本キリスト召団の十二年の足跡が刻み込まれている。全召団にとって最大の行事ともいえるべき毎年の夏期福音特別集会（第 27 回から第 35 回までを収録）、春秋の京都特別集会、その他各召団の創立記念の折々の集会などが、そこでの小池先生の講筵内容（要約）とともに記録されているのである。

この機会に各召団の方々に呼びかけたいことが一つある。それは、ぜひとも、改めて創刊号から今日まで（49 号ということになるが）の各号に掲載された小池先生の文章（講演、自伝、聖書講解、神学的論説）などを再読、三読、熟読玩味していただきたい、ということである。各号それぞれが、生きた、血の通った、生命あふれる文章である。のみならずそれが集積された全体（創刊号～49 号）という一つのまとまりとして通覧するならば、更に妙なる光を放ち、見事な調和をなしているのである。その特徴を拾いあげるならば、

（１）福音の神学的把握。旧約の預言者（イザヤ、エレミヤ、アモス、ホセア、ミカなど）——新約のパウロ——宗教改革者ルターという太い貫きの中で、十字架と聖霊を福音の二焦点として（イザヤ書 53 章の十字架の砕けと同 35 章の聖霊の生命と愛の溢れる天国の相）、全聖書を神の救いの本願の展開の角度からとらえる。

（２）歴史的使命の自覚。キリスト教史および世界の精神史の中での、我々に賜った使命の明確な自覚。

（３）愛国の熱情、憂国の叫び。日本および日本国民が真に世界に貢献すべき道はいずこにあるか、の洞察。

右の（１）（２）（３）は相互に関連しているが、とりわけ私は（１）を強調したい。色んな宗教の渦巻く中で我々は何に立脚しているのか、その自覚が今日極めて重要だと考えるからである。（１）から必然的に（２）（３）へと展開する）



「エン・クリスト」第 50 号 創世記 (第 13 回) ヨセフの勝利

1992 年 4 月発行

●無実の罪を着せられて

ファラオの侍従長ポティファルの家で奴隸として誠実に働き、主人の信頼を勝ち得て平穩な日々を送っていたヨセフに、突然の試練が訪れた。ポティファルの妻がヨセフにしくく言い寄り、これを拒否したヨセフのことを彼女は主人にぎん訴したのだ。怒った主人はヨセフの言い分も聞かぬまま、彼を投獄してしまった。ヨセフの運命は瞬時にして暗転した。しかし、ここでも主はヨセフと共におられ、彼を恵み、彼を護られた。(創 39・7、23)

ある日のこと、ヨセフのいる監獄にエジプト王の給仕役の長と料理役の長とが、それぞれ囚人として送り込まれてきた。幾日か後、二人が同じ夜にそれぞれ不思議な夢を見、その夢のことで悩んでいた。ヨセフは神の霊智をもつて二人の夢を解いてやった。給仕役の長の夢は吉夢で、間もなくファラオのもとに復職するという内容だった。ヨセフは彼に、復職のあかつきには自分のこと(無実の罪で投獄されていること)をファラオに執り成してくれるよう頼んでおいたのだが、給仕役の長は復職後そのことを失念してしまった。ヨセフはなお二年間、監獄の生活を送らねばならなかった。しかし遂に好機が到来した。今度はファラオが意味ありげな夢を見たのである。そして国中にこの王の夢を解き明かす者が一人もいなかった。このとき例の給仕役の長がファラオにヨセフのことを話した。ファラオはすぐにヨセフを呼び寄せた。

●夢を解くヨセフ

ファラオの夢は次のようなものであった。王が夢の中でナイル川の岸に立っていると、突然、よく肥えたつややかな七頭の雌牛が川から上がって来て草を食べ始めた。するとその後から、今度は貧弱でとても醜いやせた七頭の雌牛が上がって来て、初めのよく肥えた七頭の雌牛を食い尽くしてしまったが、なお醜いままだった。もう一つの夢は、よく実の入った七つの穂が一本の茎から出てきた。その後から、やせ細った干からびた七つの穂が生えて来て、先の、よく実った七つの穂をのみ込んでしまった、というのである。ヨセフは、夢を解き明かすのは自分ではなく神であること、

「神がファラオの幸いについて告げられるのです」(創 41・16)

と言つて次のように解き明かした。即ち、二つの夢は一つの事態を表わしている。今から



七年間、エジプトの国全体に大豊作が訪れる。その後、七年間の大飢饉に見舞われる。ファラオが夢を二度も見たのは、神がこのことを既に決定しておられ、間もなく実行しようとなさっているからだ。だから王としては直ぐに対策を講じ、来たるべき大豊作の間に穀物を蓄えて、その後に襲う大飢饉に対する万全の備えをなさるように、と。

●ヨセフ、宰相に

ファラオも側近たちもヨセフの言葉に感心した。ファラオは、

「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか」

と言ってヨセフを宰相の地位に抜てきした。先入観なしに、ヨセフの非凡さ、偉大さを見抜いたファラオは見上げたものだと思う。それ程までにヨセフの中の神の霊は光り輝いていたということであろう。

ファラオは、ヨセフにツアフェナト・パネア（「神は語り、そして神は生きている」との意）という名を与え、オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナトを妻として与えた（創 41・45）。

「飢饉の年がやって来る前に、ヨセフに二人の息子が生まれた。ヨセフは長男をマナセ（忘れさせる）と名付けて言った。『神が、わたしの苦労と父の家のことをすべて忘れさせてくださった。』また、次男をエフライム（増やす）と名付けて言った。『神は、悩みの地で、わたしに子孫を増やしてくださいました。』」（創 41・50～52）

●兄たち、エジプトへ

エジプトの国に七年間の大豊作が終ると、ヨセフの予言どおり七年の飢饉が始まった。世界の各地の人々は穀物を求めてエジプトのヨセフのもとにやって来た。ヨセフの故郷のヤコブ（イスラエル）のところでも同様であった。ヤコブは十人の兄弟たち（ヤコブの息子たち）に、エジプトへ下って行って穀物を買求めてくるよう言いつけた。ただし末子のベニヤミンだけは手離さなかった。エジプトで穀物の販売を取り仕切っているのがヨセフだとは露知らずに、兄たちはヨセフのところに来て、地面にひれ伏してヨセフを拝した。幼い頃にヨセフの見た夢が現実となったのである。ヨセフは一目で兄たちだと気付いたが、そしらぬ振りをし、十人もの一団となつてやって来た彼らは、きつとエジプトの国情を探りに来た回し者に相違ないと言って彼らを責め立てた。兄たちは身の証しを立てようと、家族のこと、父のこと、末の弟のことなどを話した。そこでヨセフは、

「いちばん末の弟をここに来させよ。それまではお前たちをここから出すわけにはいかぬ」

と言って、彼らを三日間、牢獄に監禁した。（創 42・1～17）

三日目になつてヨセフは彼らに言った。



「こうすれば、お前たちの命を助けてやろう。わたしは神を畏れる者だ。お前たちが本当に正直な人間だというのなら、兄弟のうちの一人だけを牢獄に監禁するから、ほかの者は皆、飢えているお前たちの家族のために穀物を持って帰り、末の弟をここへ連れて来い。そうしてお前たちの言い分が確かめられたら、殺されはしない。」

彼らは同意して互いに言った。

「ああ、我々は弟のことで罰を受けているのだ。弟が我々に助けを求めたとき、あれほどの苦しみを見ながら、耳を貸そうとしなかった。それで、この苦しみが我々にふりかかった。」(創 42・18～21)

彼らの話を聞き分けていたヨセフは、

「彼らから遠ざかって泣いた。それからまた戻って来て、話をしたうえでシメオンを選び出し、彼らの見えている前で縛り上げた。」(創 42・24)

●ベニヤミンとの再会

帰ってきた息子たちから事の一部しじゅうを聞かされたヤコブは、どんなことがあってもベニヤミンだけはエジプトへやりたくないと言い張った。しかし、持ち帰った穀物が尽きはたとき、そうとばかりいつておれなくなつた。穀物を求めて行くからにはベニヤミンを同行させねばならない。生命にかけてもベニヤミンを守り抜くからとのユダの必死の説得に、遂にヤコブも折れた。

「どうか、全能の神がその人の前でお前たちに憐みを施し、もう一人の兄弟〔シメオン〕と、このベニヤミンを返してくださいように。このわたしがどうしても子供を失わねばならないのなら、失つてもよい。」(創 43・14)

息子たちは贈り物を携え、ベニヤミンを連れて、早速エジプトへ下って行った。

「さて、一行がヨセフの前に進み出ると、ヨセフはベニヤミンが一緒なのを見て、自分の家を任せている執事に言った。『この人達を家へお連れしなさい。それから、家畜を屠^{ほふ}つて料理を調えなさい。昼の食事をこの人たちと一緒にするから。』執事はヨセフに言われたとおりにし、一同をヨセフの屋敷へ連れて行った。」(創 43・15～17)

彼らは贈り物を調べて、ヨセフの帰宅を待った。帰宅したヨセフは一同の安否を尋ねた後、

「年をとった父上は元気か。まだ生きておられるか」

と尋ねた。父が元気でいると聞いて、

「ヨセフは、同じ母から生まれた弟ベニヤミンをじつと見つめて、『前に話していた末の弟はこれか』と尋ね、『わたしの子よ。神の恵みがお前にあるように』と言うと、ヨセフは急いで席を外した。弟懐かしさに、胸が熱くなり、



涙がこぼれそうになったからである。ヨセフは奥の部屋に入ると泣いた。」(創 43・29～30)。

故郷の年老いた父を思い、また血を分けた弟ベニヤミンを思うヨセフの心がひしひしと伝わってくる。

やがてヨセフは顔を洗って出てきた。そして食事の席に着くことになった。ヨセフは兄弟たち一人ひとりの席を指定したが、その順序が兄弟たちの年齢順とぴたり一致していたので彼らは驚いた。また、ベニヤミンに運ばれた料理は、他の兄弟の分より五倍も多かった。こうして彼らは飲み、ヨセフと共に楽しんだ。

●ヨセフ、兄たちを試みる

翌朝、彼らの出発の時が来た。ヨセフは前日、彼らの知らぬうちに、執事に命じて、彼らの袋に運べる限りの多くの食糧を満たしたうえ、各自の袋の口に穀物代金の銀を入れさせた。加えてベニヤミンの袋には、ヨセフ愛用の大切な銀の杯を一緒に入れさせた。何も知らぬ彼らは、夜明けとともに見送りを受けて、ろばと共に出発した。彼らが町を出てまだ遠くへ行かないうちに、ヨセフは執事に命じて彼らを追跡させ、

「どうしてお前たちは悪をもって善に報いるのだ。主人の大切な銀の杯が見つからないのだ」

と、彼らに盗みの嫌疑をかけたのである。いいがかりもいいところだとばかりに彼らは潔白を主張した。

「僕どもの中のだれからでも杯が見つければ、その者は死罪に、ほかのわたしどもも皆、御主人様の奴隸になります。」

と。そこで年長順に袋を調べたところ最後のベニヤミンの袋の中にまさしく銀の杯はあった。

「彼らは衣を引き裂き、めいめい自分のろばに荷を積むと、町へ引き返した。」

(創 44・1～13)。

前日の楽しかった昼げのひとつとき、そして一夜明けて持ちきれないほどの食糧を手にし、シメオンもベニヤミンも無事で、いそいそと父ヤコブのもとへと急ぐ道すがらのこの出来事。ベニヤミンの袋に銀の杯が！ 何故、どうしてこんなことが！

ユダと兄弟たちとは、ヨセフの家にはいったが、ヨセフがなおそこにいたので、彼らはその前で地にひれ伏した。ヨセフの叱責の言葉に対してユダが言った。

「今更、何の申し開きもできません。神が僕どもの罪を暴かれたのです。」(創

44・16)。

そして、全員が主君の奴隸になりました。とのユダの申出に、ヨセフは、ただ杯の見つかった者だけでいい。他の者は無事に父のもとへ帰れ、という。



ここでユダが進み出て、その心中を吐露して言った。父がいかに今も亡きヨセフを悼^{いた}んでいることか、そして、ベニヤミンにいかになきな愛情を注いでいるかを。

「父の魂はこの子の魂と堅く結ばれていますから、この子がいけないことを知って、父は死んでしまうでしょう。」

と。ベニヤミンを生命がけで護り、父を悲しませまいとする必死の思いのユダの言葉にヨセフはいたく感動した。そして、もうこれ以上、自分を制していることができなくなった。側近の者をみんな部屋の外へ出したあと、ヨセフは兄弟たちに己が身の上を明かし、声を上げて泣いた。

「兄弟たちはヨセフの前で驚きのあまり、答えることができなかった。……兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。『私はあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、私をここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神が私をあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲つていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。神が私をあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。私をここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神が私をファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。』(創45・3～8)

ヨセフと兄弟たちとの劇的な再会はこのようにして全うされた。それにしてもヨセフはなぜ二度までも兄たちを試みたのだろうか。第一回目は兄たちを回し者だと責め立ててシメオンを人質にとった。これは、長い間離れていた間の兄たちの心を知りたかったこと、また何よりもベニヤミンを来させたかったための手段だったとみられよう。そのベニヤミンが連れられて来、^{たの}愉しい昼げを共にしたあと、ベニヤミンの穀物袋に銀の杯を入れたあの罠^{わな}は何のためだったのか。それは決して私的な復讐——昔の兄たちの仕業に対する——ではなかった。神が兄たちに昔の罪を徹底的に悟らしめ、その罰を自覚せしめ、その心を徹底的に砕くこと、砕けの魂へと導くことに御旨があつたのではあるまいか。ヨセフは神の御旨(神智)によつてこのような振舞いをさせられたのではあるまいか。じじつ兄たちは十分に過去の過ちをざんげしたのみならず、老いた父の身の上を案じ、末弟の生命を護らんとして、兄たち全員が主君(ヨセフ)の奴隷となることさえ辞さなかったのである。このような兄たちの真情はヨセフの心の琴線にふれた。ヨセフの心に怨みはなかった。

「命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。」

……わたしをここに遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。」

とのヨセフの言葉に、彼の真情と愛と信仰が溢れ出ている。長い忍耐の年月、しかし彼は



神に信頼して耐え抜いた。主なる神は、彼を護り抜かれた。彼は兄たちに対して、自ら復讐することなく、神の御旨にすべてを委ね、善（愛）をもつて悪に勝ったのである。

「ヨセフは、弟ベニヤミンの首を抱いて泣いた。ベニヤミンもヨセフの首を抱いて泣いた。ヨセフは兄弟たち皆に口づけし、彼らを抱いて泣いた。その後、兄弟たちはヨセフと語り合った。」（創 45・14～15）

●歴史を導き給う神

ヨセフの物語はまだ続くが、ここでこれまでのところを振り返ってみよう。アブラハム、イサク、ヤコブを導き給うた神は、またヨセフを導き給う神であった。否、それ以上に、歴史を導き給う神であった。エジプトの七年の大豊作も、七年の大飢饉も、神の予知の中にあり、神の御手の中にあつた。エジプトでの数々の苦難ときいわい（慰め）を通して、ヨセフは自身に絶大なる御手の中に護られ、抱かれてあることを体で味わった。全托の道、信頼の道、然り、信仰、希望、愛が人のまことの道であることを。



「エン・クリスト」第52号 創世記(第14回・完) アブラハム、イサク、ヤコブの神

1992年10月発行

本誌に連載してきた「創世記」は本号で最終回を迎える。前回(第50号)の「ヨセフの勝利」をもつてヨセフの物語はクライマックス(最高潮)に達した。今回とりあげる第45章後半から第50章は、ヨセフが父ヤコブと兄弟たちをエジプトに迎えるところから始まり、エジプトでのヤコブとヨセフを軸に展開する。そのときヤコブは既に130歳の老齢に達している。一方ヨセフはほぼ40歳、まさに壮年。ファラオや家臣たちの信任は篤く、また民衆からも敬慕されている。その意味で表舞台ではヨセフが主人公であるが、くり返し読んでくうちに、ヤコブの存在が次第に大きく映ってくるのではないか。わき役であるはずのヤコブが実は主役なのだ、ということに気付かされた。そしてそのことに深い神の摂理が働いていることも。そんな角度から今日のところをたどることにしよう。

●ヤコブ、エジプトへ

「ヨセフの兄弟たちがやって来たという知らせがファラオの宮廷に伝わると、ファラオも家来たちも喜んだ」(創45・16)

いかにヨセフがファラオや家来たちに好意をもつて受け入れられているかがうかがえる。ヨセフは兄弟たちに再会したとき、父と兄弟たちがカナンの地を去つてこのエジプトに来るように、エジプトの統治者である自分が父上とその家族らにできる限りのことをしたことから申し出ているが、ファラオもヨセフに同じことをすすめている。兄弟たちは、この厚意を受け入れた。

「ヨセフは、ファラオの命令に従つて、彼らに馬車を与え、また道中の食糧を与えた。ヨセフは更に全員にそれぞれ疋着を与えたが、特にベニヤミンには銀三百枚と疋着五枚を与えた。父にも、エジプトの最良のものを積んだろば十頭と、穀物やパン、それに父の道中に必要な食糧を積んだ雌ろば十頭を贈った。いよいよ兄弟たちを送り出すとき、出発にあたってヨセフは、『途

中で、争わないでください』と言った。」(創45・21～24)

「途中で争わないでください」とはどういうことなのだろう。それは、父にヨセフの無事を告げることは父にとつての良きしらせである反面、兄たちが長年父を欺き続けてきた事実の露見にもつながりかねず、それを思うと兄たちは道中穏やかな気持ではおられまい、あの時誰があんなことをたくらんだのかなど過去の悪事の責任をめぐって兄たちが道中争う



ようなことになってはいけないとのヨセフの深い配慮の言葉と解する(新聖書注解・旧約1〔いのちのことば社〕252頁)。

さて、

「兄弟たちはエジプトからカナン地方へ上って行き、父ヤコブのもとへ帰ると、直ちに報告した。『ヨセフがまだ生きています。しかも、エジプト全国を治める者になっています』。父は気が遠くなった。彼らの言うことが信じられなかったのである。彼らはヨセフが話したとおりのことを、残らず父に語り、ヨセフが父を乗せるために遣わした馬車を見せた。父ヤコブは元氣を取り戻した。」(創45・25～27)

「元氣を取り戻した」とは、「ルーアハが生きた」との意。ルーアハは「霊」とも「息」とも訳される。「失っていた活力の回復。ヨセフを失って以来の、失われたものの復活」(新聖書注解〔前掲〕)。ヨセフを失って以来のヤコブは死人のごとくであった。信仰の勇者ヤコブの面影は消え失せていた。死んだはずのヨセフが生きていた。しかも、思いもよらぬ栄光の座を占めて。ヤコブにとっては復活のヨセフである。復活者ヨセフが死せるヤコブを復活せしめた。まさに「元の氣」がよみがえったのである。

「イスラエル〔ヤコブ〕は言った。『よかった。息子ヨセフがまだ生きていたとは。わたしは行こう。死ぬ前に、どうしても会いたい。』」(創45・28)

こうして、

「イスラエルは、一家を挙げて旅立った。そして、ベエル・シェバに着くと、父イサクの神にいけにえをささげた。その夜、幻の中で神がイスラエルに、『ヤコブ、ヤコブ』と呼びかけた。彼が、『はい』と答えると、神は言われた。『わたしは神、あなたの父の神である。エジプトへ下ることを恐れてはならない。わたしはあなたをそこで大いなる国民にする。わたしがあなたと共にエジプトへ下り、わたしがあなたを必ず連れ戻す。ヨセフがあなたのまぶたを閉じてくれるであろう。』」(創46・1～4)

大いなる飢饉のためとはいえ、またヨセフの招きのゆえとはいえ、神が賜った約束の地カナンを去ってエジプトへ下ることに申訳ないとの気持もあったであろう。そのヤコブの思いを察してか、神が顕現して下さったのである。思えば若かりし時、父母のもとを追われるようにして北のパダン・アラムへと出立したその旅路において、石を枕の仮寝の夢に神は顕現し、大いなる祝福の約束をもつて励まして下さった(創28・10～22、本誌42号「ヤコブの旅路(1)」)。その後、辛苦の20年の異国での生活の後、家族を連れて故郷へ帰る道すがら、エサウの復讐を恐れておののいていた夜、あの祈りの中で、天の使いが現われてヤコブと取っ組み合いを演じ、大いなる祝福を授けていただいた。あの時から「イスラエル」と改名したのだった(創32・22～32、本誌47号「ヤコブの旅路(3)」)。今、人生の最晩年に異国エ



ジプトへと旅立つにあたって、神はヤコブに現われ、力強く語りかけ給うた。全く予期せずして神の御声を聴き、力を賜った。何たる恵み、何たる恵福さいわいか。ヨセフを失ってから20数年の間、神はヤコブを見棄てておられたわけではなかった。神は、忍耐して時の満ちるのを待つておられたのだ。

「あなたがたは立ち返って、落ちついているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る。」

「それゆえ、主は待つていて、あなたがたに恵みを施される。それゆえ、主は立ちあがって、あなたがたをあわれまれる。主は公平の神でいらせられる。

すべて主を待ち望む者はさいわいである。」(イザヤ書30・15、18)

こうしてヤコブは一族をひき連れてエジプトへ行つた。そして、ゴシエンの地でヨセフに再会する。

「ヨセフは父を見るやいなや、父の首に抱きつき、その首にすがったまま、しばらく泣きつづけた。イスラエルはヨセフに言った。『わたしはもう死んでもよい。お前がまだ生きていて、お前の顔を見ることができたのだから。』」(創

46・29～30)

ヨセフは兄弟たちをファラオに会わせ、また、父ヤコブを連れてファラオにあいさつする。エジプトの最も良い土地に父上と兄弟たちを住まわせるがよい、とのファラオの言葉にしたがって、ヨセフは

「父と兄弟たちの住まいを定め、エジプトの国に所有地を与えた。そこはラメセス地方〔ゴシエンを指す別の名。ナイル・デルタ地方東部〕の最も良い土地であつた。ヨセフはまた、父と兄弟たちと父の家族の者すべてを養い、扶養すべき者の数に従つて食糧を与えた。」(創47・11～12)

● 統治者ヨセフ

エジプトをはじめカナン地方の飢饉は年とともに激しさを増し、人々は苦しみあえいだ。ヨセフは、エジプトの国とカナン地方の人々が穀物の代金として支払った銀をすべて集め、それをファラオの宮廷に納めた。銀が尽き果てると家畜と引き換えに食糧を分け与えた。それも無くなった年には、人々には「体と農地」だけしか残っていなかった。彼らはヨセフのところに来て言った。

「食糧と引き換えに、わたしどもと土地を買い上げてください。わたしどもは

農地とともに、ファラオの奴隷になります。種をお与えください」(創47・19)

ヨセフはそのようにした。こうしてエジプト全土は、祭司の農地を除き、すべてファラオのものとなった。また、民は、エジプト領の端から端まで、ファラオの奴隷となった。ヨセフは彼らに種を与え、畑に蒔かせた。そして、収穫の時には、五分の一をファラオに



納め、五分の四は彼らのものとするようにと予め命じた。奴隷といっても、実際に奴隷として扱われたわけではなさそうであり、二割の小作料(物納)は決して苛酷なものではなかった。彼らはヨセフに言った。「あなたさまはわたしの命の恩人です」と。こうしてヨセフはエジプトの土地国有化を果たすとともに、収穫の五分の一をファラオに納めることをエジプトの農業の定めとした。そしてそれは後の時代まで長く続いた、という(創47・20～26)。

●ヤコブの遺言と祝福

ヤコブはエジプトに来てから17年生きるのだが、その死が近づいたとき、ヨセフに対し、

「どうか、わたしをこのエジプトには葬らないでくれ。わたしが先祖たちと共に眠りについたなら、わたしをエジプトから運び出して、先祖たちの墓に葬ってほしい」

と言い、このことを

「わたしのために慈しみとまことをもって実行すると、誓ってほしい」

と願う。ヨセフはこれを誓った(創47・29～31)。ヤコブのこの遺言は、カナンからエジプトへの旅立ちに際して、神がヤコブに賜った約束、「わたしがあなたを必ず連れ戻す」との約束に対するヤコブの全身的な応答であった。またヤコブは、病床にヨセフとその二人の息子マナセとエフライムを呼び寄せ、「力を奮い起こして」寝台の上に座り、彼らを祝福する。そして、エフライムとマナセをヤコブの子供にしたい、と言う。つまり、ルベンやシメオンらと同じ地位に立つ、養子というわけである。ヤコブはヨセフの二人の息子を抱きしめ、次いで右手を弟であるエフライムの頭の上に置き、左手をマナセの頭の上に置いた。

「そして、ヨセフを祝福して言った。『わたしの先祖アブラハムとイサクがその御前に歩んだ神よ。わたしの生涯を今日まで導かれた牧者なる神よ。わたしをあらゆる苦しみから贖われた御使いよ。』

どうか、この子供たちの上に祝福をお与えください。

どうか、わたしの名とわたしの先祖アブラハム、イサクの名が彼らによって覚えられますように。

どうか、彼らがこの地上に数多く増え続けますように。』(創48・1～16)

ヨセフは、父が右手をエフライムの頭の上に置いていることに不満の意を表わすと、父はそれに対して。

「いや、分かっている。わたしの子よ、わたしには分かっている。この子「マナセ」も一つの民となり、大きくなるであろう。しかし、弟の方が彼よりも大きくなり、その子孫は国々に満ちるものとなる」(創48・19)

と答え、父の行為が自覚的・意図的行為であることを明らかにした。そして、彼は、エフ



ライムとマナセに対して最大限の祝福の言葉を贈った。即ち、今より後、わたし（イスラエル）が人を祝福するにあたっては、

「どうか、神があなたをエフライムとマナセのようになさるる様に」

と唱えるほどに、今この二人を祝福したまえ、との意である。

このように、ヤコブがエフライムをマナセの上に立てたのは、ヤコブの肉（自我）の思いではなく、神に迫られての信仰の行為であつた。それ故にこそ、このヤコブの祝福の行為が「信仰に因る」ものとしてヘブル書11章21節において賞讃されているのである。

次いでヤコブは息子たちを呼び寄せて順々に祝福し、併せて予言の言葉を語る（創49・1～28）。長子ルベン、勢い盛んで力も強いが、水のように奔放で長子の誉れを失う、とのこと。シメオンとレビは暴虐の剣の故に（創34章）、分散させられる。支配権は第四子のユダに授けられる。ユダは若い獅子、

「王笏はユダから離れず、統治の枝は足の間から離れない」。

事実、ユダ族は最も強力な支族となり、そこから全イスラエルの王、ダビデが出るのである。最も豊かな祝福にあずかるのはヨセフである。

「ヨセフは実を結ぶ若木、泉のほとりの実を結ぶ若木、その枝は石垣を越えて伸びる。……どうか、あなたの父の神があなたを助け、全能者によつてあなた

は祝福を受けるように。上は天の祝福（雨露）、下は横たわる淵の祝福（泉、地下水）、乳房と母の胎の祝福（子宝）をもつて。……」

とあるように。このようにヤコブは父たるの権威をもつて、それぞれに息子たちへの祝福と予言を語ったのち、静かに息を引き取るのである（創49・29～33）。

「ヨセフは父の顔に伏して泣き、口づけした」（創50・1）。

それから、侍医たちに命じて手厚く遺体に防腐処置をさせる。その処置のために実に40日を費やしたという。そして、エジプト人は70日の間喪に服した。7日間にわたる荘厳な葬儀ののち、父の命令どおり息子たちは、先祖たちの眠るマクペラの畑の洞穴に父のなきがらを葬った。

●赦しの再確認

ヨセフの兄たちは、父ヤコブが死んだ今、もしやヨセフが昔のことを恨んで報復をするのではないかとおそれた。彼らは人を介して、ヨセフに赦しを乞い、亡き父もそれを願っていたと伝えた。

「これを聞いて、ヨセフは涙を流した」。

やがて、兄たち自身もやって来て、ひれ伏し赦しを乞うた。ヨセフは、兄たちの悪しきくらみをも神は善に変え、

「多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」と「兄た



ちを慰め、優しく語りかけた。」(創50・15～21)
ヨセフは110歳で死に、遺骸はエジプトの地に葬られた。死を前にしてヨセフは兄弟たちに言った。

「神は必ずあなたたちを顧みてくださり、この国からアブラハム、イサク、ヤコブに誓われた土地に導きのぼってくださいます」「そのときには、わたしの骨をここから携えて上ってください」(創50・22～26)。

アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、この神にヨセフは全生涯を献げた。

(1992年9月28日 記)



「エン・クリスト」53 号 天命を知る

1993 年 1 月発行

創世記の連載も前号で終り一区切がついたので、今回は何か随想風のものでも書いてもらんとの御すすめを主筆の小池先生からいただいたので、お言葉にしたがつて今回は、多少私の日常生活に関わることや、現在の所感を書かせていただこうと思う。

●一、京都キリスト召団の発

私たち家族が——といつても妻幸子と長女裕美（当時ちょうど小学校に入学する年）の三人家族だが——鴨川のはとりの現在の住居に引越して来たのは、1966 年（昭和 41 年）春のことだった。風光明媚、静かな落ちついた環境のこの住居に移り住んで一番に思ったのは、ここを祈りの家として主に献げたいということであった。以来 6 年間、週 1 回の夜の祈祷会が数人の信友たちと続けられて来た。その内容は、主として小池先生の講筵テープを聴いて一緒に祈るといふものだった。この週一回の祈祷会が私にとつては同時に聖書の学びの時でもあった。その間、1967 年 9 月には二女恵子が生まれた。この頃、前後して、K さん、Y さん、U 君、M 君らが来会していた。

次いで 1972 年 1 月から、それまでお世話になって来た群れから離れて新しく独立伝道の歩みを始めることとなった。今、私の手もとに一冊のドイツ語聖書がある。ヘルマン・メンゲ (Hermann Menge) 訳になるものである。その聖書の内扉に、丁寧な文字で次のように記されている。

「奥田昌道兄

一九七二年からの新しき道に祈り奉る

主の御霊御言の御啓導を！

「われは道なり真理なり生命なり」

——イエス——

一九七一年降誕節

小池辰雄」

クリスマスに私が上京した際、先生が銀座の教文館に私を連れて行ってくださり、そこで買い求めて贈呈して下さった聖書である。私は最近よくこの聖書をひもとくようになった。なかなか味わい深い訳である。

こうして独立の集会を始めたものの、当初は集会の名前もなく、ごく少人数のささやかな



学びと祈りの集いであった。私にとっては集会の名前は問題ではなかった。ただ主の御霊導を求めて、ひたすら内に沈潜し、聖書を霊の糧として食らい、御霊・御言によって養われ、内的に燃やされることだけが問題だった。小池先生の諸著作や、講筵テープが助けであった。そして 2 年目の夏、1973 年の夏期福音特別集会が小池先生の主宰される東京キリスト召団主催により西伊豆松崎で開催され、京都からも私たち家族と数人の信友たちが参加した。この松崎の特別集会は京都の群れにとって忘れ難い、記念すべき集会となった。全集会の主題は「キリストの信望愛」、垂幕の標語は

「汝ら世にありて患難あり、されど雄々しかれ。我れ既に世に勝てり。」(ヨハネ 16・33)

「心安かれ我れなり懼るな!」(マタイ 14・27)

であった。第 1 回集会は「イエスの信」が主題で「人生の風波」の演題、第 2 回集会は「キリストの望」の主題で「目を覚まし居れ」、第 3 回集会は「キリストの愛」というように、キリストの信望愛に焦点を結んで講筵が展開された。私は第 2 回集会の司会を仰せつかったが、その司会の中で、

「今回の集会にのぞんで、私は京都の集会を『京都キリスト召団』と名づけるように決意しました。ハレルヤです。」

と語っている(「ハレルヤ」誌 33 号、1973 年 10 月)。

このように、新しい独立の歩みとしては 1972 年 1 月 1 日から出発したが、集会の名称を京都キリスト召団と名乗ったのは一年半後の 1973 年 8 月のことだった。東京キリスト召団の兄弟団として同信の道を、使徒的信仰の道を共に歩みたいとの願いであった。

新しい歩みを始めた時、私は 40 歳の手前であった。それが今年(1992 年)の秋には 60 歳になってしまった。身の程知らずのことをやって来たものだと思わぬではない。けれども、やむにやまれぬ思いであった。ひたむきだった。それだけは言える。伝道などという大仰なものではない。ただ聖書の真理、キリストという御人格——我は道なり真理なり生命なりの主キリスト——が私の中に化体していただきだった。聖職者とか宗教家といった特別のカテゴリの人ではなく、普通の人間が、そう、普通にこの世の職業に携わり、悩み・苦しみを一杯背負った人間が、その身そのまま、あるがままでキリストの無条件の救いにあずかり、キリストの無量なる愛、無量なる生命を賜って喜びと感謝に溢れて生きる。光り輝いて生きる。そして、この愛なるキリスト、無量寿・無量光のキリストを伝えないでいられない。そんな思いから、ひたむきに主キリストを求め、主キリストの中へ投身する祈りを積み重ねてきた。

妻は祈りの中で、よくイザヤ書 43 章の中の

「我かれらをわが栄光のために創造せり」(イザヤ 43・7)

「この民はわが頌美^{ほまれ}をのべしめんとて我おのれのために造れるなり」(イザヤ



43・21)

との言を引きながら次のように祈っていた。

「主様、この京都キリスト召団は、あなたがお建てになった群れであります。人が生み出したものではありません。あなたが生み出された群れです。だから決して倒れることはありません。あなたがお創りになったのですから、あなたが全うして下さい。」

●二、現実生活のさなかで

ところで、大学に奉職する身は激務の最中^{さなか}にある。外部の方には想像しがたいであろう。心ゆくまで研究書に読み入り、思索し、研究に没頭して時を忘れる。そのような研究と錬磨の成果の上に教育（教授）を展開する。こういう牧歌的な研究・教育活動はもはや夢となつてしまった。大学の管理・運営上のさまざまな仕事、教育改革の諸論議、大学入試の改革のゆえに導入された 2 回の試験、社会人の受け入れ、帰国子女の受け入れ（すべてそのための独自の入学試験が必要）、大学院の改革とそれに伴う新たな入試、など、何かを行うたびにそれはことごとく教員の仕事となつてはね返ってくる。教育をとつてみても、旧制大学のように教授の研究に打ち込む姿を見て学生も自ら学ぶというそういう時代が羨^{うらやま}しい。受験、受験の詰め込み教育の中で自ら思索し自ら学ぶという習慣をもたない学生は、木目こまかい、手とり足とりの指導をしないとついてこれないようだ。このように教育上の負担や学内の諸事務の負担が増えているほかに、学外では、専門知識を活用しての「学識経験者」としての公的諸業務がある（東京で会合が開かれることが多い）。他方、研究に関連した仕事としては、学会の業務のほか、法学の専門雑誌や出版企画に論稿を求められ、未済の原稿、べ切を大幅に過ぎてなお手つかずのままの執筆債務などがいつも身の上に重くのしかかっている（厳格な定期刊行物のほかは、出版社・編集委員も、ある程度、期限を猶予して待ってくれる）。実は「エン・クリスト」の原稿を書くとき、いつもこういう状態の中で、法律専門誌の方から電話の督促を受けながらそれを抑えて、必死の思いで書いているというのが実状なのだ。

研究も、講義も、その他の諸々の仕事も、どれもこれも中途半端だ。とくに、学部での講義と大学院での講義の準備ができないこと、したがって満足な講義ができないことが一番辛く、申訳ない。しかし私は、もう自分を責めることはやめた。責めたところでどうしようもないのだ。また、無理を重ねると身体をこわしてしまふ。もし、すべての仕事を完璧に、かつ滞りなくこなそうと思えば、聖日集会は中止、あらゆる運動（ジョギング、水泳など）は禁止、ということになるう。それでも処理しきれなかどうかわからない。だから私は開き直すことにしたのだ。聖日集会はやり抜く。適当な運動はやりつづける（持続的に仕事を上から必要なのだ。それに 10 年先、20 年先の仕事のための先行投資なのだ。強靱な身体と



精神を今から培っておくのだ！。

できるだけ生活のリズムを崩さないこと。与えられた条件、環境の中でベストを尽くす。それしかない。何事にも祈り心で対処するほかなし。いわゆる我意を棄てること。主様に一切を委ねまつる。

「主はわが牧者なり、我にともしきことあらじ。主は我をみどりの野に臥させ、
いこいの水濱^{みぎわ}にともない給う」(詩篇23)

その代わり、我には誇るところ一切無し。自らを責めることも、自らを誇ることも一切無し。すべて主様だ。

「我は汝らに審^{さば}かれ、或は人の審判^{さばぎ}によりて審かるることを最小^{いと}さき事とし、
また自らも己を審かず。」(コリント前書4・3)

「僕^{しもべ}、命ぜられし事を為したればとて、主人これに謝すべきか。かくのごとく
汝らも命ぜられし事をことごとく為したる時『われらは無益なる僕なり、
為すべき事を為したるのみ』と言え」(ルカ伝17・9～10)

私は、このパウロの心、ルカ伝の主の御言が大好きだ。全く

「我は無益なる僕なり、為すべき事を為したるのみ」

の境地でいつもありたい(なかなか「為すべき事」が「為せない」で困るのだが)。

「また為す所の凡^{すべ}ての事、あるいは言あるいは行為、みな主イエスの名に頼^よ
て為^なし、彼によりて父なる神に感謝せよ。」(コロサイ書3・17)

それに有難いのは次の主の言である。

「凡て勞する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません。我は柔和
にして心卑^{ひく}ければ、我が軛^{くびき}を負いて我に学べ、さらば靈魂^{たましひ}に休息^{やすみ}を得ん。わ
が軛^{やす}は易く、わが荷^{かろ}は軽ければなり」(マタイ伝11・28～30)

この言を発し給うた主キリストは、誰よりも負い難い荷を負われた方であつた。そして
人の弱さを思いやることのできるお方であつた。その方が、

「わが軛は易く、わが荷は軽し」

と言っておられるのだ。そして一緒に背負おうではないか、一緒に行こうではないかと招
いて下さる。私は正直、このお言葉に会うと何かすうつと軽くなる思いがする。すうつと
心の中が明かるくなる。ああ、これこそ「我が主様だ」と思う。

人は他人と比較したら駄目だ。良きにつけ悪しきにつけ、比較したら駄目だ。主様と自分、
主様と一対一で向かい合う。主様の眼差しに会い、主様の御声を聴く(私にとっては、御言
に出会うことが聴くことなのだ)。これが最善、最良の道だ。

私は週2回くらい朝早く起きて鴨川畔をジョギングする。とても楽しい。実にさわやか
である。鴨川の四季はすばらしい。山々の眺め、川の流れ、水鳥の姿、樹々のたたずまい(今
は紅葉が美しい)。祈り心地で走る。いろんなことに思いを馳せる。み言が浮かんできたりす



る。思わず、「主様！」と御名を呼ぶ。

どんな境遇にあつても、心は自由でありたい。いろんなとらわれから解き放たれてありたい。それは、主様の中に在るときにのみ、そうだ。主様から目をそらすと失われる。

「我は如何なる状さまに居るとも、足ることを学びたればなり。我は……一切の秘訣を得たり。我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。」（ピリピ

書 4・11、12）

パウロとともに、いつも聖名をたたえてありたい。

（1992 年 11 月 26 日）



「エン・クリスト」特別号 (54 号)

小池先生卒寿記念集会の恵み

1994 年 4 月発行

1994 年 2 月 6 日 (日)、小池辰雄先生の卒寿 (九十歳) を記念しての東京キリスト召団の集會に、京都キリスト召団の兄弟姉妹たちの祝意を体して馳せ参じた。

「わが人生」と題する先生の御講筵は、生い立ちから現在に至るまでの 90 年の人生の回顧と、長い人生を貫いて先生の中に息づく主キリストの無限無量の恵みの告白であったが、その御講筵の中でとくに印象深かったのは、次の二つのことだった。

その一つは、先生の御母上に対する深き限りなき感謝と思慕の思いである。先生が御母上を天界に送られたのは 37 年前、1957 年 1 月 19 日のことであるが、今もなお先生は、

「私は存在を母に、信仰を兄に負う」

と、御母上の深き慈愛と御苦勞を切々と語られた。幼少時に御父上を失われ、御母上の女手一つで育まれてこられた先生にとつては、存在的には御母上が全てであった。

いま一つ、私が深い感動を覚えたのは、先生の次の告白である。

「私はキリストから『無』を賜った。」

私はこれまでに幾度となく、この告白を先生の集會において、御講筵の中で聴いてきた。しかし、この度はまた、全く新しい思いでこれを聴いたのである。いや、視たのである。

「キリストから『無』を賜った。」

凡そ「信仰」という事態に関しては、先生が告白しておられるのは、この一事に尽きると言つて過言ではない。これが先生にとつての原点であり、全てなのである。先生には、このことが有難くて有難くてしょうがないのだ。先生がこれを告白されるたびに、先生の中から異言が迸り出る。とどめることができないまでに。それほどまでに、一回、一回のこの告白が、全身的であり、全存在的なのである。

「恵福^{さいわい}なるかな、靈の貧^{さいわい}しき者、天国はその人のものなり」 (マタイ 5・3)

のキリストの山上の大告白を、先生は、

「恵福なるかな、汝、わが十字架によりて既に靈貧しくされてある者よ、復活

の我、聖靈の我、汝の衷^{うち}にあり」

との響きをもって靈聴されてより、キリストの十字架の贖罪は、先生自身の全存在を根源より贖う絶対恩寵の根源現実となった。

キリストの十字架の贖いの絶対恩寵の事態を、

「私はキリストから『無』を賜った」



との告白をもって証言した人を私は他に知らない。そして、私はこの度改めてこの告白の凄さに、その奥深さに打たれたのである。これが我々の福音の土台である。私はこの先生の告白される

「賜りたる『無』」

の継承者でありたい。先生がパイオニアであり第一走者であるなら、私たち次の世代は第二走者である。そして、第三走者、第四走者へと、たすきをつないでいかなければならない。

私が先生に初めてお目にかかったのは 1959 年の晩秋、まだ 27 歳の時だった。その私が還暦を越えてしまった。その間に先生を通していただいたもう一つ大切なことは、

「天賦天職」

ということだ。

「神さまは人間を一人として同じには創られなかった。指紋がみな違うように、一人ひとりそれぞれに独一の存在として創造されている。一人ひとりにその人らしい天賦の素質、才能を賜っている。一人として例外は無いのだ。この天賦の素質、才能に目覚め、これを活かす生き方をせよ！ そのような仕事を見つけ、生涯かけてそれに打ち込むのだ。それが神さまの悦び給うところだ」

と。これが先生の示して下さった「天賦天職」ということだ。

「まず神の国と神の義を求めよ」(マタイ 5・33)

との、神中心の生き方、

「御国を来たらせ給え」

との祈りと、天賦天職に目覚めて打ち込む生涯とが、矛盾しないばかりか、ほんとうの力強い生き生きとした生き方として、正に「終末的天国人」としてのすばらしい生き方であることを、私は先生との出会いを通して、そしてそれ以来の三十数年の歩みの中で体感できるようになった。現実の世においては、ズレは避け難く、天賦天職を見出すことは至難のことであろう。しかし主キリストは、私たちを第二の、あるいは第三の天賦天職へと導いて下さる。ロマ書にある通り、

「^{みたま}御霊は神の^{みこころ}御意に^{かな}適いて^{とりな}聖徒のために執成し給えばなり。神を愛する者、す

なわち^{みむね}御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを

我らは知る」(ロマ 8・27～28)

のである。



「エン・クリスト」56号

小池辰雄先生告別式式辞

1996年9月1日

ただ今、故人略歴のご紹介がございましたとおり、小池辰雄先生は学者として、教育者として、また伝道者として、92年のご生涯を貫かれました。先生は東京大学教授、獨協大学教授、獨協中学・高校校長として、教育・研究の面で多大の功績を残されましたが、先生のご生涯を貫いていたのは、主イエス・キリストの僕として神・キリストに己を献げる信仰者としての姿でありました。

先生はつねづね終生の恩人としてご長兄の政美様、そしてお母上光子様のことを語っておられました。と申しますのも、先生は既に5歳のときに父上を亡くされました。そのあと、父に代わって面倒をみてくださったのは長兄の政美様であり、また、母上は女手ひとつで五人の子女を育てられました。その父の代わりともいべき政美お兄様は1927年9月22日に外地北京におきまして26歳1か月というまことに短い生涯を閉じられ天に昇られました。お母様はご遺骨を抱いて北京から帰る船旅の途上で過労と落胆のあまり失明されてしまいました。このお兄様の死とお母様の失明という思いがけない二つのでき事は先生を人生のどん底につき落とし、やがてそのことが先生の目を主キリストへと開かせることとなり、以後、先生は終生、キリストのために、また天上のお兄様のために自分の生涯を献げるという気持でご生涯を貫かれました。

1940年9月22日、お母様をお慰めするために武蔵野吉祥寺のご自宅で聖書伝道を目的とする独立集会を聞かれました。ときに36歳でございました。10年間、旧約聖書を、特に預言書を深く研究し、講義をなさいました。1950年の11月、信仰の上での大突破を体験されました。キリストの直弟子たちが体験したように、先生は天界のキリストから直々に聖霊のバプテスマを賜られ、御霊の火が先生の中に燃え移りました。あのキリストの直弟子たち、使徒たちと同次元の信仰へと飛躍されました。それから実に46年の永きにわたって、先生は活けるキリストを告白し続けてこられました。

先生の信仰の神髄は、1975年、71歳の時からやつきばやに出版された全十巻から成る『小池辰雄著作集』に結晶しております。なかでも、第1巻『無者キリスト』、第3巻『無の神学』は顕著なものでございます。そのキーノートは、

「恵^{さいわい}福なるかな、霊の貧^ひしき者。天国はその人のものなり」

という山上の垂訓の第一句でございます。先生はイエス・キリストのことを「無者」とよばれています。この「無者」とは、虚無のひとではなく、私心無きひと、父なる神の前に



その魂が、霊がからっぽである貧しきひと、自分を何者ともしないすがたです。父なる神のみ前に己を棄てきつたすがたをいいます。神の前に霊貧しきすがたのキリストに神という天国が宿りますと、キリストは天国の充満体であられました。このキリストのみ前にいて、自ら霊貧しきすがたになれない罪びと小池はどうすればよいのか、どうすればキリストと同じ天国のすがたに化せられるのか。その先生の祈りに応えて、ある時、

「私はお前を私の十字架ですつかり贖^{あがな}った。わが十字架によって既にお前は霊貧しくされてある。私という天国をお前にやるよ。復活の我、聖霊の我、汝のうちにあり」

と、そう響いてきて、先生は畳の上に平伏^{ひれふ}して祈られました。

「われ主とともに十字架せられたり。もはや我生くるにあらず、御霊のキリス

トわがうちに生きたもうなり」

と、これがそのあとの先生のご生涯を貫く信仰告白となりました。

先生は幼子^{おきな}をととても愛されました。ご自身がいくつになっても幼子のような純真な魂を持ちつづけていらつしやいました。先生は研究面ではドイツ文学を研究され、ゲーテ、シラーに親しまれ、また、信仰面ではルターに傾倒なさいました。ドイツに対する先生の親愛のお気持は深く大きく、先生はドイツを自分の第二の故里のように思っておられました。それゆえ、先生にとってはご自分の存在がドイツと日本との精神的な架け橋でありたいと願っておられました。今、先生のご遺影のすぐ下に飾られてあります「十字章」はドイツ政府から贈られた「第一級功労十字章」でございます。先生は地上でおよそ「賞」というものを求められなかったお方ですが、無冠の帝王とでもいうべきお方でしたが、このドイツから贈られた「十字章」だけはとても喜ばれました。十字架の形をしているから、そして、自分のドイツに対する親愛の気持にドイツ国民が応えてくれたと、そういうお気持ちからでございます。

先生は、

「人生の目的は神を讃美することにある。人を愛するとは人を救い上げることである」

と常々語ってくださいました。また、

「聖霊の生命をいただいた私は絶対に死なないからね、ただ向こうの世界に往くだけだよ。小池先生は死んだなんて絶対に言わないでほしい。万歳を叫んで送ってくれよ」

と、ご高齢の先生が常に我々を励まし、生きる勇氣と力を与えてくださいました。

「私は聖名のために、キリストの聖名の栄光のために百歳を突破するんだ。そして、キリストがどんなに素晴らしい方かを自分の詩作とおして告白するんだ」

と、長年かけて黙々と詩作の道が続けてこられました。先生はご自分を詩人であるとおつ



しゃっていました。詩の形でキリストを讃^{たた}えたい、キリストにあつて生き抜いた人たちを、また日本における偉大なる魂を著したい、との祈りをもつて書き綴つてこられた大詩篇は未完のままに終わりました。先生はさぞかし残念であられると思います。先日、お見舞いたときに、

「野尻でアッシジのフランチェスコのことを書いたよ。素晴らしかったよ」

と言つておられました。その先生の志は筆半ばにして実りませんでしたけれども、これからは先生は天界より、遣された私たちに、

「強く雄々しくキリストの戦士らしく生き貫^ぬいてほしい。地上は人生の序曲に過ぎない。天上において本当の生が実るんだよ」

と励ましつづけてくださいます。

「我らの国籍は天にあり」

とパウロが告白しておりますが、天に生きる人生とはどんなものを、身をもつて先生は示してくださいました。今、先生とのお別れにあたりまして心から感謝し、主イエス・クリストの聖名を讃え奉ります。これをもちまして式辞とさせていただきます。

それでは、お祈りをさせていただきます。

主イエス・クリストさま、父なるおん神さま。あなたの愛して止みたまわなかった小池先生をとうとう私たちからとつてしまわれました。しかし、あなたは、

「泣くな、先生は生きているぞ。地上の戦いを戦い終えて、今、私の懷で安らうのだ。

これからはもつともつと、お前たちに身親しく永遠にお前たちの中に生きつづける。励ましつづけ、生きつづけるだろう」

と、今お語りくださっているように思います。先生のあの笑顔がいつも浮かびます。ひとつひとつこい、本当に優しい笑顔、優しいお心の先生、愛の深かった先生。

「聖霊の質は愛である。愛するとは人を救いあげ、担いあげることだ」

といつも仰つて、己を空しくして、天界に往かれた先生を、どうぞ今、慰め包み、天上において輝かしめてください。私たちも先生をおして天上と更に深く結ばれました。これから、遣されました者たちは互いに愛し合い助けあつて生き貫いて参ります。どうぞ、主さま、天地一知としておん導きください。御意の天になりますごとくに地にならしめ給え。この切なる祈りを主イエス・クリストの聖名によつて御前にささげ奉ります。アーメン。



「エン・クリスト」56号

東京キリスト召団の再生を祈りて

——小池辰雄先生追悼集会 感話証言から

1996年9月22日午前

小池先生は『曠野の愛』誌第34号（1960年）の「霊力的宗教か道念的福音か」と題する文章の中で次のように書いておられます。

「混沌たる……現実を、根底から救い得るものは、絶対次元に根源をもつ啓示的宗教の力のほかにない。……所謂霊力的宗教が人間を真に救うことはできない。何となれば、人間は自然的生命としての存在ではなく、人間は道念的生命的存在であるからである。」

「キリスト教の無力は、その霊的な愛の生命の枯渇にある。しかしながらここに誤解されてならないことは、霊的とは霊力的ということではない。律法（義）、霊法、聖法、聖意、霊生が一貫一如の相において十字架を貫いて受けとられることを霊的とはいう。そこには神、キリストの贖罪愛の生命がしずかに深く、力づくよく動いている。霊力的宗教ではなくして、霊的道念、愛の福音による人間変革こそ根本問題であり、急務である。愛はどん底の荷いである。一切のはでなものとちがう。

どんな霊力よりも強いものはキリストの福音の愛の力である。」

霊力的宗教は最近もキリスト教以外にもたくさんあります。若い人はそういうものに引かれてしまう。けれども、

「本当のところはこれだ」

ということを我々が身をもって証しないといけない。それには我々自身が輝いていないといけません。我々がくすぶっていたら、誰がついてきますか。

私自身において——残念ながらと申すべきか、幸いかなと申すべきか——霊力的とつか、いわゆる奇蹟の業はなにも起こりません。だから、そういう現象を慕っては誰も私のところには来ない。しかし、京都の集会にあふれている愛と歓びのすがた、それにうたれて来てくださる方はあります。そういう方は離れません。私は京都の賜った福音の道はそれだと自覚して、それを貫こうと思っています。いずれもの凄いいことが起こったら、それはキリストのなさること、一切自分には関わりないことです。私はただ小池先生が示してくださった平伏しの道を行います。小池先生の仰るのは、十字架で賜りたる無なんです。自分が無になるのではない。先生は晩年、死ぬ直前まで賜りたる無ということを仰っています。ですから、そういう先生の歩んで来られたものを、私たちはもう一度自分でしつ



かり受け止めて行きたいと思います。

先生の文章は、やはり初期の頃のは懇切丁寧です。お話だつてそうです。皆さんも、1950年代、60年代の先生の聖書講筵の録音をお聞きになれば、今とずいぶん違うと思うでしょう。なんと懇切丁寧に噛んで含めるように話しておられることか。今は、

「ぼくは簡単なんだよ。『主さま!』と、それでいいんだよ」

と、最高の境地を仰っていますが、それも素晴らしいけれども、我々は、後から行く者としては、先生のその信仰の歩みの足跡をやはり自分で踏みしめて行かなければならない。先生はこうだった、自分たちはどうすべきなのか。今、我々は、日本において世界において、今の現実の中で何をうったえていくべきなのかと。こういう自覚を我々が持つ。それにはやはり勉強することが必要です。

先生はたくさんさんの著作を残してくださいました。書物や雑誌やテープとか、勉強の材料にこと欠きません。そういうものを通して学んでいく。何も全員集まってやらなくても、家庭集会でもいい。テープを聞くとか、先生の著書を輪読するとか。そして、そこへ新しい人をお招きくださればいい。

「先生はこんな方だったよ、自分たちは全部それで甦った人間だ」

と。誰もが小池先生のようにしゃべるといふのは無理ですよ。でも、我々に求められているのは、先生の真似をすることではない。自分たち一人ひとりが天下一品で、一人ひとりがキリストによって花咲いている。そして、先生から受けたものを伝えるのに、そういう材料はたくさんあるんですから、それをまだ知らない人に

「ごちそうですよ」

と言って提供する。そして、祈りをやっていく。毎週、日を決めてでもいいし、そういうことをやっていく。そういうところから始まっていく。

今日は、先生を偲ぶ会ですけれども、私は「出陣の日」だと思ってここへ来ました。もう9月1日からそう決めていました。9月22日は先生を偲ぶ会でもあるけれども、偲ぶ会以上に出陣の日である。

「先生、私たちはこのように先生の後を受け継いで戦っていきますから、見ていてください」

と、その決意表明の日だと私は位置づけて受けとってきましたし、今日、参りました。台風が来ようが、雨が降ろうが、私は来ますよ。先生は正に嵐を呼ぶお方でありましたので、今日は先生にふさわしい。私は雨と風にずぶ濡れになりながら、そういうことを思いながらうれしくてしやうがなかった。

先生が大事にされた「無」ということは、

「神の前に己を何ものともしないで、無条件で投げ出して、無条件でいただく」

という、いただく角度です。こつちの熱心とか、こつちの立派さとかでなくて、



「キリストが迫って迫ってしょうがない、圧倒されて生きている」

いつも先生は仰っている。十字架がそれを与えてくれた。先生は、

「十字架の中へ躍り込め、十字架の中へ祈り入れ。十字架の中へ飛び込む、その修業はしつかりやれ」

と仰いました。ひところはそうでした——この頃はそんなことは仰っていないかもしれないけれども——昔の先生は恐かったですよ。特別集会で先生は一同をずっと見て、

「気合が足りん！」

と一喝される。そして、

「この福音に出合ったら……」

というような調子でやられて、

「十字架のキリストの中へ躍り込め、絶叫しろ！」

と。つまり、そうやって、我を忘れたところに聖霊は臨みたもうということ。我を忘れたところに臨みたもうから、一遍絶叫したら後は絶叫しなくてもいいと仰るわけです。でも、我々は自分に捕われていますから、一遍絶叫することは必要です。

平伏ということ、霊力ではないということ、本当に無者だということ。すべては賜るもので、派手なものではないということです。だから、先生は細い道を行かれたわけです。派手なことをやれば、人は来ます。でも先生は派手なことはお嫌いでした。自分の業を誇らない。

「どんな業が出て来ようと、それは神の業であって、私ではない」

と。先生の伝道はいわゆる計画的に鐘や太鼓でやろうというようなものではなかった。

「本ものであれば、ひとりでに花は咲き実ほこぼれる。本ものであることだけを、

皆さんは願っていきなさい」

と、それが先生の我々に遺されたお言葉でないかと思っています。

それでは、お祈りさせていただきます。

主イエス・キリストさま、父なるおん神さま、今日、小池先生の大事に大事にしてこられた、この9月22日、くしくも1940年に幕屋を開かれた日が日曜でありましたが、今日もその日曜日となりました。先生はどんなにか、ここで皆さまと一緒に福音を語り、また福音の中に身を投じ、聖名を讃えようとしておられたことかと思えます。しかし、今日は先生のお姿はありません。しかしながら、先生は本当に皆さまの御懷に抱かれ、主が復活されたように先生も復活しておられます。霊体となって今、主とともに天界から、また、霊となつて私たちを導いてくださることを感謝いたします。

主さま、あなたの御許に往かれてから、いよいよ先生が身近になりました。先生の言々句々、一字一字が本当に血となり肉となつて迫って参ります。今日、ご出席の皆さま方も本当に



アーメンであると思います。私達は決して悲しんではいません。天上の先生と共にこれからも、先生が本当に身を削り身を棄てて証してくださいましたこのキリスト道を、道なき道を私たちも進むつもりでございます。どうか、我々を導き励まし、天界の先生と一つになって、いよいよ熾^{さか}んなる生命を活かしめ、今この20世紀の終わらんとするときに、世の中は誠に惨憺たるものでありますが、この惨憺たる中であって本当に光り輝くこの福音の愛の生命を我々が実証していくことができますように。先生は常々

「愛するとは人を救いあげることだ、担い上げることだ」

と仰っております。どうぞ、私たちはどこへでも遣^{つか}わされる所で人々を担い、悲しみを共にし、また、痛みを分かちあい、そして、ついにはキリストの微笑みの中にと抱き上げることができるよう。主さま、またどうぞ遺^{のこ}されたご家族の方々を特に御顧みください。順子奥様をどうぞお護りください。この尽くしませぬ祈り、讃美、主イエス・キリストの聖名によって御前にお捧げいたします。アーメン。

